第２回生存科学シンポジウム

未来からの反射

Reflection from the Future

――プログラム・抄録集――

日時 2014年 12月 13日(土) 13:00～17:00

会場 大手町サンケイプラザ 4Fホール

第２回生存科学シンポジウム

未来からの反射

Reflection from the Future

日　時
2014年12月13日(土)
13:00 ～ 17:00

会　場
大手町サンケイプラザ
4Fホール

―― プログラム・抄録集 ――

開催にあたり

私達は今、価値観の多様化と氾濫する情報社会において、生きていることの難しさを実感しています。それぞれが自己とは何か、人間とは何か、人生とは何か、人間はいかに生きるべきか、人間性はいかにあるべきかについて考えているのではないでしょうか。

武見太郎先生は1970年、ひとり個人の生存のみならず同時代の地球上のすべての人びと、そして世代を超えて人類のより健全な、より人間らしい生存を目標とする“生存科学”という概念を提唱しました。そしてその具現化に向けて1984年、公益財団法人生存科学研究所ならびに公益信託武見記念生存科学研究基金を設立されました。先生は、21世紀における現在の混沌とした文明社会を先見し、人間について考えるあらゆる人びとに自然科学のみならず人文社会科学を含むすべての叡智を統合・融合し、つねに課題を抽出し解決に向けて挑戦し続けることを求めたのだと思います。

人であれ動物であれ、生物として生きる意義は世代の継続です。人の一生はその一コマにすぎませんが、遺伝子は過去から現在そして未来へと受け継がれていきます。地球が生まれて約46億年、生命の起源は約40億年前ですが、人類(ホモ・サピエンス)が誕生してから約10万年の歴史の中で、20世紀における科学技術の急速過ぎる発展は、環境破壊や資源枯渇のみならず少産小死という人類滅亡の道へと導いているようにさえ思えます。過去の事実から未来を予測し、現代へフィードバックし、未来を制御するという武見先生が提示された“未来からの反射”の概念こそ、最も必要なのではないでしょうか。

第2回本シンポジウムでは医学・医療の観点から“未来からの反射”をテーマとし、基調講演で日本医学会会長高久史麿先生に「医の現在と未来」をお話していただき、生存科学としての地域医療を考え、さらに感染症、認知症、在宅医療、介護について具体的に議論を深めたいと思います。

本シンポジウムにご参加頂いた皆様が、それぞれ自らの問題としてとらえ、未来を考え、そして現在の自己の生きようを見直し、自らの未来を切り開いていただくよう願っています。

シンポジウム実行委員会

シンポジウム実行委員長
笠貫 宏

ご挨拶

本日は第2回生存科学シンポジウムにご参加いただきありがとうございます。

生存科学とは1970年に故武見太郎先生が創造された「ひとり個人の生存のみならず、同時代の地球上のすべての人びと、そして世代を超えて、人類のより健全な、より人間らしい生存を目標として、既存の科学、それも自然科学のみならず社会科学、人文科学、さらには哲学・宗教・芸術までをも含めた全人間的知識の見直しと統合を科学的に行おうとする学問体系概念モデル」です。

21世紀において、人類が、なぜ、どのように、さらに、いかに生存すべきなのか、という問題提起から始まり、個別の生命現象としてとらえるとともに、地球規模で人びとが共存していくために、何を考え、何をすべきかについて英知を集めるべきです。そのために、生存科学が開発途上国から高度の先進国までを含めて、現状を把握し、未来の方向を作っていく基礎的な学問として成立し、発展させなければなりません。

生存科学の確立・普及・発展を図ることを目的に、1982年に公益信託武見記念生存科学研究基金が設立され、1984年にはハーバード大学に武見国際保健講座が開設され、公益財団法人生存科学研究所が設立されました。それぞれが急速な科学の進歩により生じる新たな危機から人類をまもるため、凡ゆる領域から総合的に『生存』問題に取り組む研究活動を続けて参りました。

生存科学シンポジウムは昨年武見国際保健講座開設30年記念シンポジウムを機に、生存科学研究基金と生存科学研究所が共催で、人類の生存に係る自然科学・人文社会科学の専門家と一般市民が集い、急速な科学の進歩により生じる新たな危機から人類をまもるために、共に考え、共通の言葉と認識を醸成し、生存科学の普及を図ることを目的に開催されました。

第2回シンポジウムでは、少子高齢社会における医療・福祉の現状を把握し、未来を予測し、その未来から現代を見直すという「未来からの反射」をテーマにいたしました。基調講演として日本医学会会長高久史麿先生に「医の現在と未来」をお話していただき、そして生存科学の現実的モデルとして包括的な地域医療を考え、感染症、認知症、在宅医療、介護について議論を進めます。

本シンポジウムにご出席頂いた皆様が、積極的にご発言していただき、自らの問題としてとらえ、未来を想い、そして現在の生きようをみつめていただけたら幸いです。

2014年12月13日

青木 清
公益財団法人生存科学研究所
理事長

高田 勗
公益信託武見記念生存科学研究基金
運営委員長

シンポジウム実行委員会

公益財団法人 生存科学研究所

本研究所は、急速な科学の進歩により生じる新たな危機から人類をまもるため、凡ゆる領域から総合的に『生存』問題に取り組む研究所として、医師会会長を長く務めた故武見太郎先生により1984年に設立されました。その活動はホームページ(http://seizon.umin.jp)に掲載されています。

会員は生存科学に関する自主研究を様々な視点から行い、講演会、シンポジウム、あるいは学術誌「生存科学」を通じ、広く一般の方々とその成果を共有するよう努めております。

高桑栄松先生

高桑基金

日本経済全体が先の見えない闇に包まれていた2011年、生存科学研究所も設立以来の厳しい経済状況に直面しておりました。そのような窮状の中、高桑栄松会員(北海道大学名誉教授、元参議院議員)は、研究所の活動をサポートするため2012年に300万円をご寄贈くださり、「生存科学」という新しい学問分野をさらに発展させるよう、励ましてくださいました。

生存科学研究所ではこの貴重な寄付金で高桑基金を創設し、3年間、広く、一般社会に英知の結晶である『生存科学』のシンポジウムを開催することといたしました。

公益信託 武見記念生存科学研究基金

当基金は、故武見太郎先生が創造した生存科学の普及・発展を図ることを目的に1982年9月に生存科学研究基金設定準備委員会により設立されました。

爾来、当基金は、人類の将来を展望し、ライフサイエンスを中心としてそれに関連する人文科学及び社会科学を加えて総合的に「人類の生存」を考究する「生存科学」の確立と推進を目的に『武見記念賞』および『生存科学武見奨励賞』を創設し、生存科学とその関連分野で顕著な業績をあげた研究者または実践者の顕彰に取組んで参りました。

故 武見太郎先生

公益信託武見記念生存科学研究基金

『武見記念賞』および『生存科学武見奨励賞』は、人類の将来を展望し、ライフサイエンスを中心としてそれに関連する人文科学及び社会科学を加えて総合的に「人類の生存」を考究する「生存科学」の確立と推進を目的に創設され、生存科学とその関連分野で顕著な業績をあげた研究者または実践者を顕彰してその業績を称えるものです。

平成26年度受賞者は以下のとおりです。 ※なお、武見記念賞は推薦方式・武見奨励賞は自薦方式です。

武見記念賞

受賞者 ハーバード大学公衆衛生大学院 教授 **河内 一郎** 氏

研究活動テーマならびに受賞理由

長年にわたり公衆衛生領域の分野において「健康に影響を与える社会的決定要因」の研究に取り組み、社会疫学の領域におけるパイオニアのひとりとしてその確立と発展に多大な貢献を果たしたことが高く評価された。

推薦者 帝京大学大学院 教授 **矢野 栄二** 氏

武見奨励賞

受賞者 名古屋大学大学院 教授 **加藤 昌志** 氏

研究活動テーマならびに受賞理由

「ヒトの生存に不可欠である安全な飲用井戸水を開発途上国に供給するための総合研究」によりヒトの生存にかかわる疾患の発生を予防し、保健・医療・福祉を向上させるための学際的総合研究を推進していることが高く評価された。

受賞者 奈良県立医科大学 講師 **岡本 希** 氏

研究活動テーマならびに受賞理由

「地域在住高齢者における認知機能障害と歯周病との関連」の研究により超高齢化社会を迎えたわが国の認知症機能障害の予防として歯周病予防の重要性を提唱するとともにその研究成果の衛生行政施策への還元に取り組んでいることが高く評価された。

プログラム

第２回生存科学シンポジウム

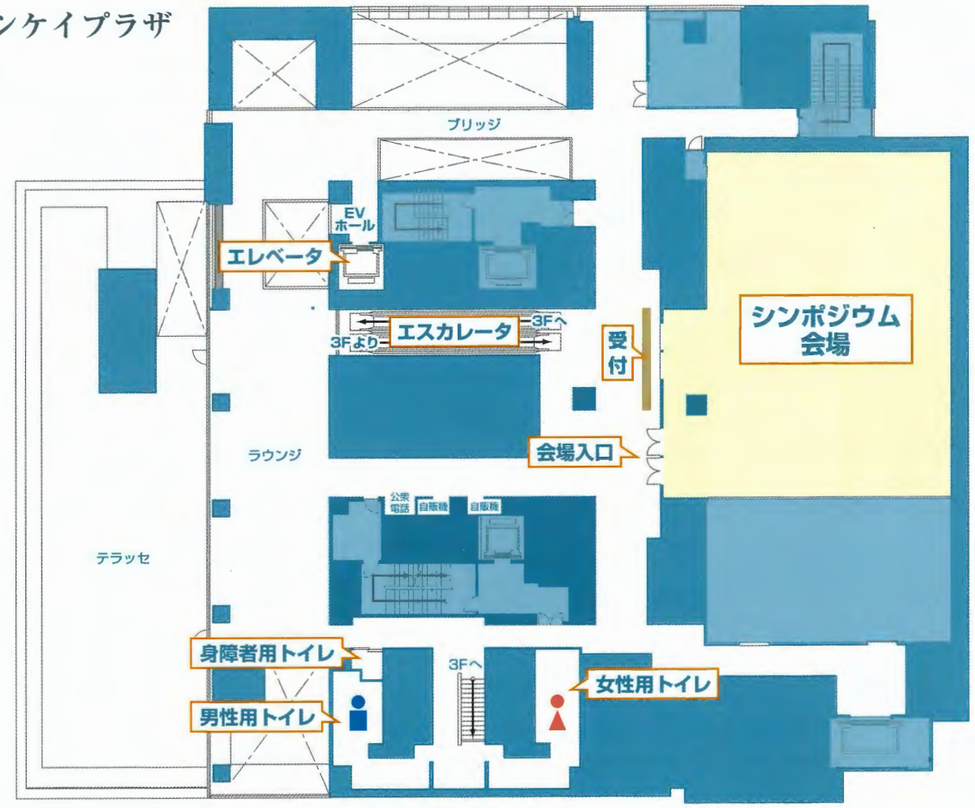
「未来からの反射」

総合司会　丸井 英二
後藤 あや

13:00〜13:10	開会の辞	武見記念生存科学研究基金	笠貫 宏
13:10〜14:10	基調講演 **医の現在と未来**	日本医学会長	髙久 史麿
14:10〜14:20	休憩		
14:20〜14:40	シンポジウム① **疫病は警告する**		濱田 篤郎
14:40〜15:00	シンポジウム② **認知症医療への期待と不安**		松下 正明
15:00〜15:20	シンポジウム③ **出前医者が語る人生を支える医療**		太田 秀樹
15:20〜15:40	シンポジウム④ **日本の医療の困った「忘れもの」**		大熊 由紀子
15:40〜15:50	休憩		
15:50〜16:55	パネルディスカッション		
16:55〜17:00	閉会の辞	生存科学研究所	青木 清

施設内会場のご案内

大手町サンケイプラザ
4Fホール



総合司会

丸井 英二
Eiji MARUI

人間総合科学大学人間学部教授

略歴

昭和47年東京大学医学部保健学科卒業。昭和52年、東京大学大学院医学系研究科博士課程(疫学専攻)修了後、東京大学医学部助手(疫学講座)、東京大学医学部講師(国際交流室)を経て、昭和61年より2年間、米国ハーバード大学公衆衛生大学院研究員(国際保健)。平成3年、東京大学教授(留学生センター・国際保健学大学院(国際疫学)兼任)、平成8年、国立国際医療センター研究所・地域保健医療研究部 部長。平成12年、順天堂大学医学部公衆衛生学教室・教授。平成24年、人間総合科学大学人間科学部教授。現在に至る。専攻領域は、疫学、医学史、国際保健、地域保健、保健医療情報システム研究。現在、厚生労働省 新型インフルエンザ専門家会議委員など。

後藤 あや
Aya GOTO

福島県立医科大学准教授

略歴

平成7年山形大学医学部卒業。平成10年米国ハーバード大学公衆衛生大学院修士課程(国際保健学)修了、平成12年山形大学大学院医学研究科博士課程(公衆衛生学)修了後、米国ポピュレション・カウンシルのベトナム支部勤務を経て、平成14年より福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座、現在、准教授。福島県の県民健康調査「妊産婦に関する調査」の副室長兼任、日本公衆衛生学会モニタリング・レポートシステム委員。平成24年から1年間、ハーバード大学公衆衛生大学院武見国際保健プログラム研究員。専門領域は、母子保健、国際保健、疫学、人材育成。

EBM Promotion http://www.hcmc-fukushima-ebm.net/

基調講演

医の現在と未来

髙久 史麿
Fumimaro TAKAKU MD,

日本医学会会長/地域医療振興協会会長/
福島県立医科大学 会津医療センター長/
前自治医科大学学長/東京大学名誉教授/医学博士

略歴

1931年	東京都生まれ
1954年	東京大学医学部卒業
1972年	自治医科大学内科教授
1982年	東京大学医学部第三内科教授
1988～1990年	同医学部長
1990年	国立病院医療センター病院長
1993～1996年	国立国際医療センター初代総長
1996～2012年	自治医科大学学長
2004年～	日本医学会会長
2013年～	福島県立医科大学 会津医療センター長

主な著書(監修・編集・翻訳を含む)

- 高久 史麿 編集『バイオテクノロジーと医療』東京大学出版会、1987年
- 日野原 重明、高久 史麿 翻訳『患者診断学―アートとサイエンスを活かして』メディカル・サイエンス・インターナショナル、1990年
- 高久 史麿『医の現在』岩波新書、1999年
- 井村 裕夫、高久 史麿 編集『岩波講座 現代医学の基礎〈15〉現代医学と社会』岩波書店、2000年
- 北村 聖、中村 丁次、高久 史麿『死の四重奏とよばれる生活習慣病―高血圧・肥満・高脂血症・糖尿病 ムック』ニュートンプレス、2003年
- 高久 史麿『新・健康のススメ―活き活き長生き』メジカルビュー社、2006年
- 北村 聖、高久 史麿『からだの通信簿―検査数値の正しい意味がことごとく、よくわかる ムック』ニュートンプレス、2005年
- 高久 史麿 監修、岩砂 和雄ほか 編集『臨床試験のABC(日本医師会生涯教育シリーズ)』医学書院、2007年
- 島田 和幸、高久 史麿『ぐんぐん健康になる食事・運動・医学の事典―性格・健康ランク別』法研、2009年
- 佐藤 智、高久 史麿ほか 編集『在宅医療の展望(明日の在宅医療)』中央法規出版、2009年
- 高久 史麿、福井 次矢、北村 惣一郎、猿田 享男『家庭医学大全科』法研、2010年
- 高久 史麿 監修、水野 肇ほか 編集『総合医の時代』社会保険出版社、2011年
- 高久 史麿 監修、田中 博 著『災害医療とIT』ライフメディコム、2012年
- 高久 史麿 監修『看護学生とナースのためのベーシックナーシングプラス』メディカルレビュー社、2013年

ほか専門書多数

シンポジウム①

疫病は警告する

濱田 篤郎
Atsuo HAMADA

日本渡航医学会 理事長／
日本熱帯医学会 理事・学会誌編集委員／
日本臨床寄生虫学会 理事／日本寄生虫学会 評議員／
日本感染症学会 評議員／日本産業衛生学会 代議員／
日本職業災害学会 評議員／日本国際保健医療学会 代議員／
日本内科学会 正会員

略歴

1981年　東京慈恵会医科大学医学部卒業、済生会中央病院・内科研修医
1983年　東京慈恵会医科大学・熱帯医学教室・助手
1984年～86年　米国Case Western Reserve大学留学（熱帯医学コース）
1989年　東京慈恵会医科大学・熱帯医学教室・講師
1994年　労働者健康福祉機構・海外勤務健康管理センター・医師
2004年　海外勤務健康管理センター・所長代理（センター長）
2010年　東京医科大学 教授、東京医科大学病院 渡航者医療センター部長
現在に至る

受賞歴

中央災害防止協会・緑十字賞（2012年）

主な著書

「旅と病の三千年史」（文春新書）
「疫病は警告する」（洋泉社新書）
「世界一病気に狙われている日本人」（講談社α新書）
「歴史を変えた旅と病」（講談社α文庫）
「新型インフルエンザ『かかる前に』『かかってから』」（講談社α新書）
「新疫病流行記」（バジリコ）
「トラベルクリニック」（医学書院）
寄生虫ビジュアル図鑑（誠文堂新光社）

疫病とは広範囲に拡大する感染症を意味する。人類はその誕生以来、この病との戦いを繰り返してきた。たとえば紀元前430年、古代ギリシャで発生した疫病は当時の中心都市であったアテネを急襲し、その人口の25％が死滅するほどの猛威をふるった。また、1348年に中世ヨーロッパで拡大した黒死病（ペスト）の流行は、3500万人という空前の死亡者数を記録している。さらに19世紀、インドから世界中に拡大したアジアコレラの流行は、ヨーロッパ諸国を一時的な麻痺状態に陥れる程の被害をもたらした。このように、人類は古くからその生存をかけて疫病との戦いにのぞみ、その都度、勝利を収めてきたわけだ。

やがて、19世紀後半の感染症学の発展により、人類は疫病の原因となる病原体に対して、ほぼ永久的な勝利を得たかに見えた。しかし、20世紀中頃から再び病原体は息を吹き返し、世界各地で疫病として流行する兆候を見せ始めている。すなわち、現在も世界的な拡大を続けているHIVの流行であり、アフリカの奥地から突如として登場したエボラ出血熱の流行である。このような新たな感染症の出現だけでなく、古くから流行していた感染症が復活し、社会的な問題になる事例も最近は数多くみられる。たとえば、2014年に東京を中心に150人以上の患者が発生したデング熱の流行はその典型例と言えるだろう。しかも、最近は国際的な人の移動が活発化しているため、一たび感染症が蔓延し始めると、それが疫病として急速に世界的拡大をおこす危険性がある。2003年に世界を震撼させたSARS（重症呼吸器症候群）の流行においては、それが現実のものになっている。

このように20世中頃から、世界各地で感染症が新たに登場し、あるいは復活を果たしているわけだが、その根本的な原因はどこにあるのか。そこには人類という生物種への生態系からの警告が秘められているように思えるのである。今回のシンポジウムでは人類と疫病の戦いの歴史を振り返りながら、現代社会でおきている感染症復活のメカニズムを解明し、未来における人類の生存と繁栄に必要な方策を提示したい。

シンポジウム②

認知症医療への期待と不安

松下 正明

Masaaki MATSUSHITA, MD, PhD

東京都健康長寿医療センター 理事長

東京大学名誉教授

専門研究分野

専門は、精神医学、老年精神医学、認知症学

元日本老年精神医学会理事長、元日本認知症学会理事、

元日本神経病理学会理事長

略歴

1962年　東京大学医学部卒業

1966年　都立松沢病院医員

1973年　東京都精神医学総合研究所副参事研究員

1986年　横浜市立大学医学部教授(精神医学講座)

1990年　東京大学医学部教授(精神医学講座)

1998年　東京都精神医学研究所所長

2001年　都立松沢病院院長

2009年　東京都健康長寿医療センター理事長

論文・著書等（最近の著書・編著のみ）

著書:

『ピック病』(2008)

『みんなの精神医学用語辞典』(2009)

『高齢社会と認知症診療』(2011)

編著:

『臨床精神医学講座(全38巻)』(1997－2001)

『司法精神医学(全6巻)』(2005－06)

『精神科リュミエール(全30巻)』(2008－12)

『新世紀の精神科治療、新装版(全10巻)』(2009)

『精神科診療データブック』(2010)

『精神医学キーワード事典』(2011)

『日本の名著論文選集、全3巻』(2013)

日本社会における高齢化現象は年々強まるばかりである。65歳以上の高齢者が総人口に占める割合が25%を超え(総人口の4人に1人は高齢者)、さらに、7人に1人は75歳以降の後期高齢者である。平均寿命も延び続け、男性でほぼ80歳に近く、女性では86歳を超えるようになったといった現象がその象徴でもある。

高齢社会に伴って生じる社会、政治、経済、医療、あるいは文化などいわゆる人間の生存への影響には甚大なものがある。とりわけ、認知症の激増は医療の枠を超え、社会全体を揺るがすほどの大きな問題となってきている。

認知症には種々のタイプの疾患があるが、全体の7割を占めるのがアルツハイマー型認知症である。アルツハイマー型認知症の特性に影響されて、認知症全体の罹病率は加齢とともに倍増する。65-69歳代では1.5%であった率が、5歳刻みで倍増し、3.6%、7.1%、14.6%と増え、85歳以降の超高齢者では27.3&、およそ4人に1人は認知症になると言われている。したがって、85歳以上の超高齢者もまた激増している日本の高齢社会は、数人に1人は認知症であるという、いわば認知症社会と称されてもおかしくない。

このような社会的背景を基底にして、本シンポジウムでは、認知症を代表してアルツハイマー型認知症を取り上げ、その医療の現状と課題を指摘し、その将来像を示してみたい。

本論の前提となるのは、1)アルツハイマー型認知症という独立した疾患があるのではなく、通常誰にでも生じている脳の老化現象が早まり、促進されていることによる現象であるという理解、2)したがって、理念的には、アルツハイマー型認知症を薬物で治療するには限界があるという理解(不老不死の薬物は存在しない)、3)アルツハイマー型認知症の治療や介護にとって最も重要な「認知症の行動と心理症状」(BPSD)を認知症の人の「心の叫び」であると見做す理解であり、それらを通して、4)認知症医療は、超高齢者への医療のみならず、保健や福祉問題、あるいは広く社会における受け入れの問題に集約しなければならないという理解である。

なお、認知症問題は、日本のみならず、世界の先進諸国での大問題でもある。最近、G8を中心に認知症の国家戦略についての議論が持ち上がっているが、その点についても少し触れることになる。

シンポジウム③

出前医者が語る人生を支える医療

太田 秀樹

Hideki OHTA, MD, PhD

医療法人アスムス 理事長

専門研究分野活動

診療所地域医療／高齢者医療／障害者医療

1992年より訪問看護を基軸とし24時間・365日往診に対応できるグループプラクティスで在宅医療を実践し、約800症例の在宅看取りを経験した。現在機能強化型在宅療養支援診療所として約300症例の在宅療養を支えている。在宅医療普及推進の市民的活動も積極的に行い、在宅医療推進拠点事業(平成24年厚生労働省より受託)・コミュニティーでつくる高齢社会のデザイン(平成22年度~24年度社会技術研究機構より受託)など研究活動にも力をいれている。

略歴

1953年奈良市生まれ。1979年日本大学医学部卒　自治医科大学大学院医学研究科修了。

自治医科大学整形外科専任講師・医局長を経て、1992年おやま城北クリニック(小山市)を開業し、在宅医療を始める。医学博士。日本整形外科学会認定専門医。麻酔科標榜医。介護支援専門員。日本医師会在宅医療連絡協議会委員。全国知事会先進政策頭脳センター委員。厚生労働省検討会委員など。

論文等

1　在宅医療. かかりつけ医機能強化研修会～第2回 日本医師会 在宅医リーダー研修会～、日本医師会、17-24,2014

2　在宅療養支援診療所への期待と今後活動. 医薬ジャーナル4月号Vol.49.No.4:103-108,2013

3　在宅医療実践者の立場から. 臨床倫理,No.1: 14-17,2013
在宅医療の過去・現在・未来.「かかりつけ医の在宅医療 超高齢社会―私たちのミッション」.
公益社団法人 日本医師会、77-80,2013

4　在宅療養支援診療所の現在と課題. 日本医師会雑誌、1515-1517,2013

5　在宅医療 こころと技.「治す医療から、支える医療へ」木星社: 2 -50, 2012

6　地域包括ケアシステムにおける在宅医療.「日本再生のための医療連携」株式会社スズケン:210-216,2012

7　地域包括ケアにおける在宅医療の役割.「地域包括ケアシステム」株式会社オーム社: 90-107,2012

8　地域の在宅医の立場から.日本看護協会出版会, 看護3月号Vol64 No.4:36-39,2012

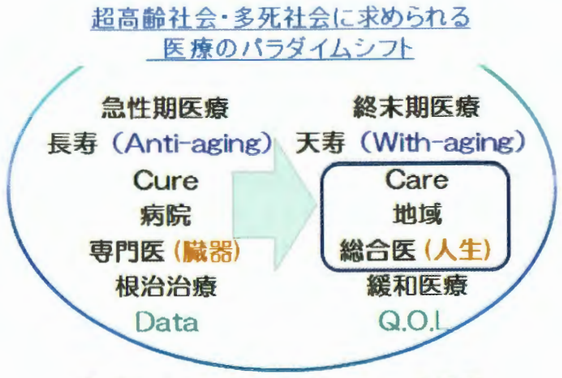
9　在宅医療の本質と未来 病院との連携の重要性. 医学書院、病院1月号69巻、第1号:26-30,2010

10　ドキュメンタリー映画「終りよければすべてよし」(羽田澄子監督)に出演　2006年

700万人ともいわれる団塊世代が高齢者の仲間入りをし、4人に1人が高齢者となった。そして、3人に1人が高齢者という世界に類を見ない超高齢社会が目前に迫っている。超高齢社会は換言すると多死社会であり、おびただしい数の高齢者が、どこで、どのように暮らし、一体どのようなかたちで人生を締めくくるのであろうか。孤独死報道に象徴されるように、地域社会のなかで孤立したまま、誰に看取られることもなく、ひっそり命を閉じる高齢者の存在は、高齢者医療や介護に対する関心の高まりと同時に漠然とした将来への不安をいだかせる状況となっている。そこで住み慣れた地域で、築かれた絆を大切に、人生の最期まで安心してくらせるようにと「地域包括ケアシステム」の構築が、基礎自治体にゆだねられ重要な役割となっている。さらに地域医療・介護総合確保推進法をはじめ法制度からも強力に在宅医療への牽引が始まり、在宅医療への期待は一層大きなものになっている。1分1秒命を長らえさせる医療から、尊厳ある天寿を支える医療へと、医療のパラダイムが大きく変わったといえる。

ところが、在宅医療への偏見や誤解は未だ払しょくされたとは言い難く、財政論から誘導された粗悪で安上がりの医療とのイメージも残る。そこで、四半世紀にわたり出前医療を実践し、望まれれば生活の場での終末期を支えてきた経験から、機動力ある医療の本質的な意義や役割をお伝えしたい。さらに、病院での看取りが日本の文化になった社会的背景にも言及し、「せめて畳の上で往生したい」と願う、多くの国民のささやかな希望に応えるため、在宅医療の普及推進を目指した職能団体の動きや市民的な活動についてもふれ、社会全体といってもよい大きな意識改革について私見を述べたい。

病院医療改革と在宅医療の推進は表裏一体といえるが、日本人の生き様にかかわる、人生を支える医療と表現してもよいだろう。そして、在宅医療の推進が実は、日本の文化を変え、地域を創るきっかけとなるのだと信じている。



病院中心のヘルスケアシステムの限界

シンポジウム④

日本の医療の困った「忘れもの」

大熊 由紀子
Yukiko OKUMA

国際医療福祉大学大学院教授（医療福祉ジャーナリズム分野）
福祉と医療・現場と政策をつなぐ志の縁結び係＆小間使い

略歴

父、祖父、曽祖父、その父、叔父、伯父、従弟……医師以外の職業がいない家に生まれ育ちました。あまりのうっかりものであること自覚し、生化学者を目指して東京大学へ。さらに転じて、教養学科で科学史・科学哲学を専攻。朝日新聞社科学部次長を経て、1984年、論説委員に。主に医療、福祉、科学、分野の社説を17年間担当。大阪大学大学院教授をへて現職。

主な著書

◆『「寝たきり老人」のいる国いない国～真の豊かさへの挑戦』（ぶどう社）。30刷のロングセラーになり、第１章は介護保険のメニューになりました。

◆論説委員時代の社説の一部に、その後のエピソードを加えたのが『福祉が変わる医療が変わる～日本を変えようとした70の社説＋α』（ぶどう社）

◆大阪大学大学院教授時代、「ボランティアは、ほっとかれへん人」という浪花語訳に触発されて書いたのは『恋するようにボランティアを～優しき挑戦者たち』（ぶどう社）

◆『物語・介護保険～いのちの尊厳のための70のドラマ』上下２巻（岩波書店）は、2000年に成立するまでの波瀾万丈を描いたもので、制度づくりにかかわった300人の方々が登場します。

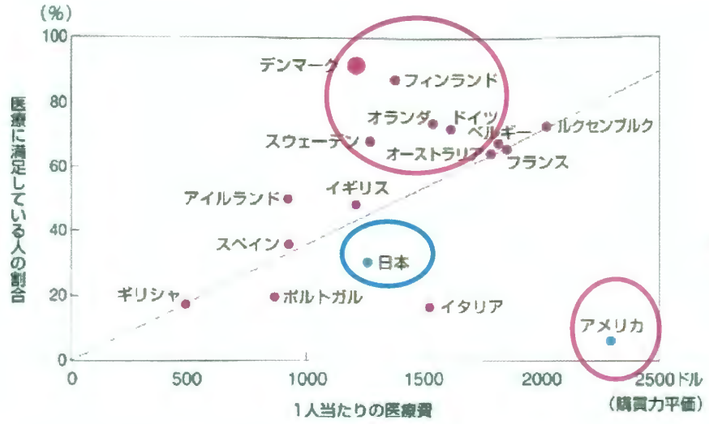
◆『患者の声を医療生かす』（医学書院）は、デンマークの「でんぐりがえしプロジェクト」に触発され、国際医療福祉大学大学院で開いた公開講義を、文化人類学者と一緒にまとめた本です。

activity

◇福祉と医療・現場と政策をつなぐ「えにし」ネット・志の縁結び係＆小間使いを名乗り、14か国、約6000人の志高き方々に「えにしメール」をお送りしています。本日ご登壇の皆様のほとんどにも(^_-)-☆

◇「えにし」のホームページ http://www.yuki-enishi.com/ の「優しき挑戦者の部屋」「認知症ケアの部屋」「私の社会保障論」「選んだ場所で誇りをもって」etc. の部屋でも発信中。「ゆきえにし」で検索してくださると最初の方に出てきます(^_-)-☆

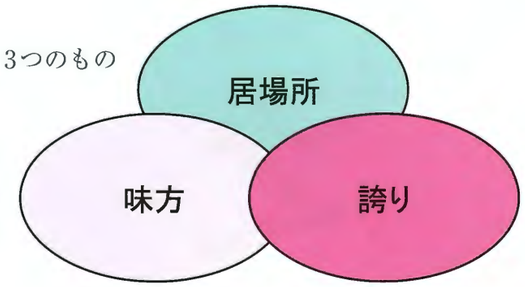
一人あたりの医療費と満足度比較



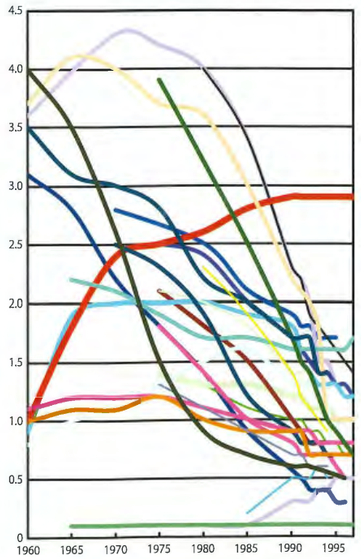
●Mossialos,E. Citizens'view on health care systems in the 15 member States of the European Union Health Economics. Vol.6:109-116(1997)

●Blendon,R.J., Leitman,R., Morrison,I. and Donelan,K. Satisfaction with health systems in ten nations. health Affairs Summer 1990:185-192

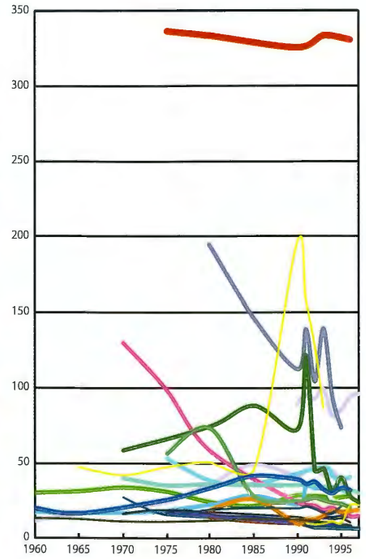
人が必要な3つのもの



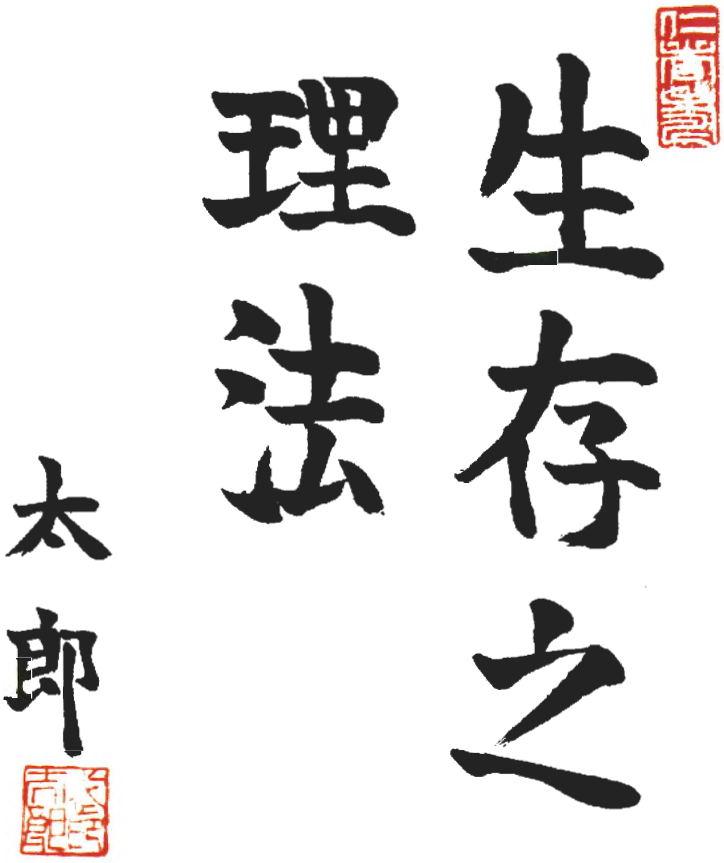
人口1000人あたりの精神病床



精神病院平均在院日数OECD



福祉と医療・現場と政策をつなぐ
「えにし」ネットのHP
http://www.yuki-enishi.com/
「選んだ場所で誇りをもって」の部屋より



公益財団法人**生存科学研究所**

〒104-0061
東京都中央区銀座 4-5-1 聖書館ビル 303
tel：03-3563-3518
fax：03-3567-3608

http://seizon.umin.jp

公益信託**武見記念生存科学研究基金**

〒105-8574
東京都港区芝 3-33-1
三井住友信託銀行株式会社
リテール受託業務部 公益信託グループ
Tel：03-5232-8910